

優秀賞

三年目の入学式

福岡県 福岡市立高取中学校三年 浪方 柚季

三年生に進級する春、私は見慣れた道を通って中学校へと向かっていました。新入生の入学式の準備をするためです。門に着くと見知った顔が並んでいて、春の陽気と落ちてくる桜の花びらの下で笑顔がきらきらと輝いてる、そんな光景を愛おしく思いながら、私は自分の一年生の入学式を思い返していました。

中学校に上がるタイミングで引越してきた私は、学校への道も、周りを歩いている同学年らしき人も自分の着ている制服も見ることがないものばかりでした。そんな状況から目を背けたくて、下を向く。そこからしばらくはよく覚えていないけれど、入学式の会場である体育館に入ったときはよく覚えていません。見渡す限りの椅子、椅子、人、人、あまりの多さに、私はこの大勢の中でひとりぼっちで生きていくことになるのかと、息をのみました。結

局、入学式のことには緊張と不安のあまりそれ以上は覚えていなくて、ただ帰り道は冷たい雨が降っており、ますます下を向いて歩いたことだけは今も思い出すことができます。

その次の年の同じ頃、私は焦っていました。その頃の私は部活でやっているバレーボールに夢中で、うまくなることばかり考えていました。だから、体育館で活動する部活で新入生の入学式を準備することが嫌で面倒臭くて、憤りさえ感じていました。新三年生に指示された通りに椅子を運びつつ、脳内はバレーボールのことではいっぱいでした。

そして三年生になる春、私はメジャーを持って椅子の間隔を測り、みんなに声をかけるようになっていました。新二年生は皆、面倒だと言わんばかりの顔をしていて、去年の私を見ているようでなんだか可笑しく思えました。私はもう二回目だから平気、

だけどこれがこの中学校で最後の入学式準備かと考えると、寂しくもありました。けれど、友達と笑い合いながら新入生のことを考え、汗を流して準備する時間はとてもあたたかく、美しく、ずっと続いたら良いとすら思いました。また私がこうして準備をする時間は有限でも、次の学年のために汗を流して笑い合うこの時間は、今までもこれからも不変で、果てしなく続くもののようにすら感じられました。中学校での三回の入学式は、私に自分の成長と、人が人を思いやることの連鎖がいかにあたたかく美しく、尊いものなのかを教えてくださいました。三度春がやってくるうちに、塞ぎ込んでいた私の心にも春がやってきて、思いやることや助け合うことを美しいとすら思えるようになる。他の人から見たら、入学式準備なんて小さな出来事でしょう。けれど、それが確かに私の心を揺さぶっていたのは、帰った後、柄でもなく溢れ出した涙が物語っていました。

